平野秀吉の著作目録と著作物の特徴

槇田善衛

一　はじめに

平野秀吉はこの数年にわたる調査研究により、教育者、国文学者、校歌作詞者、登山家としての業績が明らかになりつつある。[1][2][3][4][5][6] しかしながら、平野秀吉の著作物を断片的にまとめた刊行物『平野秀吉』、『平野秀吉資料目録』に、目録の一部は存在するものの、[7][8] 網羅的にまとめた著作目録ならびに全集は存在していない。また網羅的にまとめた著作目録がないことで、平野秀吉の人物史研究を遅延させる結果となっている。

そこで本研究では平野秀吉の網羅的な著作目録を作成することで、平野秀吉の業績の全貌を明らかにするとともに、著作物の傾向に基づく分類（著作群）から、平野秀吉の著作物の特徴を示すことができ、人物史研究に貢献できると考えている。

二　研究方法

著作物については、NDL-OPAC（National Diet Library Online Public Access Catalog）、CiNii Books、CiNii Articles、『平野秀吉』、[9]『平野秀吉資料目録』[10]、新潟県立図書館雑誌／記事検索データベースによって、一般に刊行された図書、論文等・作詞、その他を知ることは可能である。

ここでは著作目録の対象を図書、図書以外の論文等・作詞、その他

1　槇田善衛「平野秀吉の偉業と会津八一について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十六号』越佐文人研究会,2013,pp.48-59。

2　槇田善衛「会津八一と恩師平野秀吉」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十七号』越佐文人研究会,2014,pp.31-44。

3　槇田善衛「平野秀吉と相馬御風の交流」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十七号』越佐文人研究会,2014,pp.45-52。

4　槇田善衛「平野秀吉が作詞した校歌と作曲者小林禮・田中信太郎・小出浩平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十八号』越佐文人研究会,2015,pp.153-173。

5　槇田善衛「平野秀吉が作詞した新潟県立小千谷高等女学校の校歌と作曲者大和田愛羅と校長斎藤秀平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十九号』越佐文人研究会,2016,pp.148-163。

6　槇田善衛「平野秀吉が記した「榮光帖」と『日本アルプス登山案内記』発行に伴う登山家高頭仁兵衛・大平晟・槇有恒との交流を明らかにする」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第二十二号』越佐文人研究会,2019,pp.173-195。

7　小泉孝『巻町双書第十七集　平野秀吉』巻町役場,1971,94p。平野秀吉の「全釈萬葉集昭和略解」とその関連著作についての、未刊行物を紹介しているものの、『越佐教育雑誌』や校歌等の作詞についての記載はみられない。

8　巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録№六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,16p。平野秀吉の「全釈萬葉集昭和略解」とその関連著作、歌集についての、未刊行物を紹介しているものの、『越佐教育雑誌』や校歌等の作詞についての記載はみられない。

9　小泉孝『巻町双書第十七集　平野秀吉』巻町役場,1971,94p。

10　巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録№六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,16p。

の著作に分け、図書についてはNDL-OPAC、CiNii Books、『平野秀吉』、『平野秀吉資料目録』で確認されたものを示す。また、論文等・作詞についてはNDL-OPAC、CiNii Articles、『平野秀吉』、『平野秀吉資料目録』、新潟県立図書館雑誌／記事検索データベースで確認されたものを示すとともに、論文等・作詞の一部は『越佐教育雑誌』[11]に掲載されていることから、後継雑誌を含む『越佐教育雑誌』の全頁モニタリングを行い、確認されたものを示す。さらに、その他については『平野秀吉』、『平野秀吉資料目録』で確認されたものを示す。

目録の順序については出版年順とし、共著の著作は末尾の備考で共著者の名を示した。またNDL-OPAC、CiNii Books、CiNii Articles、『平野秀吉』、『平野秀吉資料目録』、新潟県立図書館雑誌／記事検索データベースにおいて旧字体で表記されているものについてはそのまま掲載した。

三　平野秀吉の著作（図書）

以下の十七点を確認することができた。

凡例：『書名』出版社、発表年月（共著者、シリーズ名、版、総頁数、その他備考など）

①『実用文典』林平次郎、一八九五（明治二十八）年七月（遠藤國太郎、平野秀吉、田中勇吉著、全二八二頁）

②『国語声音学』国光社、一九〇二（明治三十五）年十二月（全二二六頁）

③『綴り方教授の根本的研究』六合館、一九一五（大正四）年五月（全五一六頁）

④『日本アルプス登山案内記　附歌集駒草』斯文書院、一九二七（昭和二）年六月（全三四八頁）[12]

⑤『日本アルプス登山案内記　附歌集駒草』斯文書院、一九二七（昭和二）年七月（全三四八頁）

⑥『山嶽歌集　駒くさ』斯文書院、一九二八（昭和三）年十月（一四六頁）

⑦『日本アルプス登山案内記』斯文書院、一九二九（昭和四）年六月（四年版、全三四八頁）

⑧『唐詩選全釈』東洋図書刊行会、一九二九（昭和四）年十月（七八六頁）

⑨『日本アルプス登山案内記』田口書店、一九三〇（昭和五）年五月（五年版、全三四八頁）

⑩『日本アルプス登山案内記』田口書店、一九三一（昭和六）年五月（六年版、全三四八頁）

⑪『山嶽の歌第二集　高嶺いばら』木曜会、一九三九（昭和十四）年六月（全二八八頁）

---

11 『越佐教育雑誌』の第一号は一八九三（明治二十六）年一月十五日に発刊された。発刊の辞には「我ガ越佐教育雑誌ハ前新潟縣教育會報告ノ化身再生ナリ（略）縣下教育社會ノ氣脈ヲ通ジ時勢ニ應ジテ教育ノ上進改良ヲ圖ルニアルノミ（略）随時随所越佐教育ノ爲メ緊急必要ト認ムル法令記事論文ヲ掲載スルヲ以テ主眼トナシ」とある。『越佐教育雑誌』は一九一七（大正六）年十一月十日発行の第二百九十九号まで続き、一九一八（大正七）年十二月十五日発行の第三百号からは『越佐教育』に名称が変更し、さらに一九三五（昭和十）年八月十日発行の第五百十四号からは『新潟縣教育』に名称が変更し、一九四四（昭和十九）年三月十日発行の第六百十五号をもって廃止された。

12 著者名は平野秀吉ではなく、平田秀吉とある。

⑫『良寛と萬葉集』文理書院、一九四七（昭和二十二）年十月（全二一六頁）

⑬『良寛と萬葉集』文理書院、一九六六（昭和四十一）年九月（浅田壮太郎補遺、全二八一頁）

⑭『全釈萬葉集昭和略解　総論・巻一・巻二』巻町・潟東村教育委員会、一九八〇（昭和五十五）年三月（巻町双書第二十八集、全三九三頁）

⑮『全釈萬葉集昭和略解　巻三』巻町・潟東村教育委員会、一九八一（昭和五十六）年三月（巻町双書第二十九集、全一五一頁）

⑯『全釈萬葉集昭和略解　巻十四』巻町教育委員会、一九八三（昭和五十八）年三月（巻町双書第三十一集、全一七〇頁）

⑰『萬葉集短歌選』巻町郷土資料館、一九八四（昭和五十九）年八月（巻町郷土資料館資料目録No.六　平野秀吉資料目録別冊、全三九頁）

四　平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合

以下の十五点を確認することができた。

凡例：「題名」『書名』出版社、発表年月（編著者、掲載巻（号）、掲載頁、その他備考など）

①「図書審査ニ関シテ読本選定ノ注意付　文部省編纂読本ノ語格誤謬」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九四（明治二十七）年六月（越佐教育雑誌社、（一八）、一五～一六）

②「第四回大日本教育会夏期講習会概況」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九四（明治二十七）年九月（越佐教育雑誌社、（二一）、二三～二五）

③「田中勇吉君ノ文部省編輯尋常小学評論弁ヲ読ミテ」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九四（明治二十七）年十月（越佐教育雑誌社、（二二）、一四～一六）

④「日本ニ於ケル倫理学善悪ノ標準」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九五（明治二十八）年九月（越佐教育雑誌社、（三三）、二〇～二一）

⑤「松の雫」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九五（明治二十八）年十月（越佐教育雑誌社、（三四）、一八～一九）

⑥「松の雫（二）」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九六（明治二十九）年五月（越佐教育雑誌社、（四一）、一六～一七）

⑦「松の雫（三）」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九六（明治二十九）年十一月（越佐教育雑誌社、（四七）、一六～一七）

⑧「松の雫（四）」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九六（明治二十九）年十二月（越佐教育雑誌社、（四八）、九～一一）

⑨「薄田君に寄す」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九九（明治三十二）年一月（越佐教育雑誌社、（七三）、一九～二一）

⑩「小学語法並に修辞法講義（一）」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一九〇九（明治四十二）年十一月（越佐教育雑誌社、（二〇三）、一二～一四）

⑪「明治四十二年八月十八日登大蓮華山作歌一首並短歌」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一九〇九（明治四十二）年十一月（越佐教育雑誌社、（二〇三）、二八）

⑫「国語教授法の教材論（二）」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一九〇九（明治四十二）年十二月（越佐教育雑誌社、（二〇四）、一六～一八）

⑬「小学教育に於ける仮名遣問題（一）」『越佐教育雑誌』越佐教育雑

誌社、一九一〇（明治四十三）年三月（越佐教育雑誌社、（二〇七）、七～一二）

⑭「小学教育に於ける仮名遣問題（二）」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一九一〇（明治四十三）年四月（越佐教育雑誌社、（二〇八）、一～一五）

⑮「国語科入学試験問題に就て」『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一九一六（大正五）年四月（越佐教育雑誌社、（二八〇）、一七～一九）

五　平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』以外の場合

以下の八点を確認することができた。

凡例：「題名」『書名』出版社、発表年月（編著者、掲載巻（号）、掲載頁、その他備考など）

①「声音学に付いて」『上越教育会雑誌』上越教育会室直三郎、一九〇二（明治三十五）年一月（真保義超、（一）、十三～十五）[13]

②「除幕式謝恩式記事　平野先生御挨拶」『恩師平野先生謝恩記念誌』高田師範学校同窓会、一九三五（昭和十）年二月（高田師範学校同窓会編、三〇～三五）

③「祝宴会状況　平野先生御挨拶」『恩師平野先生謝恩記念誌』高田師範学校同窓会、一九三五（昭和十）年二月（高田師範学校同窓会編、四三～四六）

④「平野先生御挨拶状」『恩師平野先生謝恩記念誌』高田師範学校同窓会、一九三五（昭和十）年二月（高田師範学校同窓会編、六八～七〇）

⑤「力め行ふは仁に近し」『あゝ殉職田中文雄先生』明治図書、一九三七（昭和十二）年八月（新潟県教育会・高田師範学校同窓会共編、三二～三三）

⑥「村山紀一郎君を悼む」『村山紀一郎先生流芳録』伊比見作、一九三八（昭和十三）年十月（伊比見作編、一三八～一三九）

⑦「旭は燃えむとす」『互尊獨報　通巻第六十二号～七十三号』日本互尊社、一九四二（昭和十七）年一～十二月（遠山運平編、通巻六十二号、三二）

⑧「五色ヶ原をよめる歌」『立山と黒部』富山県郷土史会、一九六二（昭和三十七）年七月（富山県郷土史会編、富山県郷土史会叢書第七集、一二二）[14]

六　平野秀吉の著作（作詞）

以下の二十五点を確認することができた。校歌については「平野秀吉が作詞した校歌と作曲者小林禮・田中信太郎・小出浩平」および「平野秀吉が作詞した新潟県立小千谷高等女学校の校歌と作曲者大和田愛

[13] 上越教育会雑誌発刊の辞（会長　阿多廣介）によれば「（略）上越ト下越トハ山河ノ形勢利害ヲ異ニシ米山一帯ニヨリテ人情風俗ヲ別ニスル（略）此方面ヲ統一セル教育機關ノ必要アル所以ニテ上越教育會ハ則チ此ノ必要アリテ組織セラレタルモノナリ（略）越佐教育雑誌ト共ニ両々相對峙シ相提携シテ本縣教育上ノ刷新ヲ企圖セントス（略）」とある。（真保義超『上越教育会雑誌第一号』上越教育会室直三郎,1902,pp.1-2°）

[14] 著者名は平野秀吉ではなく、平田秀吉とある。

羅と校長斎藤秀平」を参考とした[15、16]。

凡例：「曲名」作曲者名、発表年月（編著者、『書名』出版社、発表年月、掲載巻（号）、掲載頁など）

①「支那征伐の歌（元寇の譜）」曲なし、一八九四（明治二十七）年十月（越佐教育雑誌社編、『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九四（明治二十七）年十月、（二二）、二〇～二一）

②「討清軍歌」曲なし、一八九四（明治二十七）年十月（越佐教育雑誌社編、『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九四（明治二十七）年十月、（二二）、二一～二二）

③「凱旋の歌（四百餘州の譜）」曲なし、一八九五（明治二十八）年七月（越佐教育雑誌社編、『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九五（明治二十八）年七月、（三一）、一〇）

④「修身教歌」石原重雄、一八九六（明治二十九）年六月（越佐教育雑誌社編、『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一八九六（明治二十九）年六月、（四二）、一八）

⑤「歓迎の歌」渡邊彌藏、一九〇八（明治四十一）年十一月（越佐教育雑誌社編、『越佐教育雑誌』越佐教育雑誌社、一九〇九（明治四十二）年一月、（一九三）、三二）

⑥「新潟県立三条中学校校歌」不詳[17]、一九〇五（明治三十八）年十月（現新潟県立三条高等学校校歌）

⑦「指おれば」近森出来治、一九一一（明治四十四）年十一月（音楽教育会編、『音楽界』音楽教育会、一九一一（明治四十四）年十一月、十一月号、一）

⑧「新潟県高田師範学校校歌」小林禮、一九一六（大正五）年（旧譜）

⑨「新津尋常高等小学校校歌」小林禮、一九一八（大正七）年九月（現新潟市立新津第一小学校校歌）

⑩「能生尋常高等小学校校歌」小林禮、一九二〇（大正九）年十二月（現糸魚川市立能生小学校校歌）[18]

⑪「新潟県高田師範学校校歌」小林禮、一九二一（大正十）年（新譜）

⑫「稲田尋常高等小学校校歌」小林禮、一九二二（大正十一）年（現上越市立稲田小学校校歌）

⑬「戸野目尋常高等小学校校歌・上雲寺尋常高等小学校校歌」小林寿、一九二二（大正十一）年十月（現上越市立戸野目小学校校歌・上越市立上雲寺小学校校歌）[19、20]

---

15 同4。

16 同5。

17 旧制第一高等学校の寮歌（第十一回記念祭西寮寮歌）のうち、通称「春爛漫の花の色」と同じ旋律である。

18 学校沿革史の第一章學校名称によれば「能生町能生尋常高等小學校　自明治四十一（一九〇八）年六月　至昭和十六（一九四一）年三月」とある。第十三章記事要略によれば「大正九（一九二〇）年十二月二十日當校男子同窓會ノ寄附ニ係ル校歌講習ノタメ高田師範學校教諭平野秀吉小林禮両氏來校セラル平野氏校歌乃額面ニ揮毫。」とあり、さらに校歌校章校旗の「校旗」の註で「校歌・校旗とも大正九年一二月校舎新築落成を記念して男子同窓會の寄附なるものなり」とある。ちなみに校歌制定時の校長は「原田建二」といい、就職年月日は「大正二・一一・二〇」、轉退職年月日は「大正一一・三・三一」、本籍は「西頸城郡今井村」、生年月日は「明治一五・三・六」、学歴は「高田師卒」、資格職名は「高正訓兼学校長」、俸給は「九十五円」とある。（能生小学校『学校沿革史　明治九年～昭和五十四年』能生小学校,1979,pp.9,32,150,301。）

19 上越市立戸野目小学校『戸野目風土記』戸野目小学校創立百周年記念実行委員会,1973,p.39。

20 百周年記念誌編集委員会『上雲寺小学校百年のあゆみ』上越市立上雲寺小学校百周年記念事業実行委員会,1973,p.9。

⑭「小池尋常高等小学校校歌」田中信太郎、一九二四（大正十三）年三月（現燕市立小池小学校校歌）

⑮「弥彦南尋常小学校校歌」田中信太郎、一九二四（大正十三）年七月（一九七〇（昭和四十五）年三月統合・閉校、現新潟県西蒲原郡弥彦村）[21]

⑯「川崎尋常高等小学校校歌」小出浩平、一九二四（大正十三）年十二月（現長岡市立川崎小学校校歌）[22]

⑰「西能生尋常小学校校歌」田中信太郎、一九二八（昭和三）年三月（一九六二（昭和三十七）年四月統合・廃校、現糸魚川市）[23、24]

⑱「柱道尋常小学校校歌」田中信太郎、一九二九（昭和四）年三月（槙校第一分校、一九六二（昭和三十七）年四月統合・廃校、現糸魚川市）[25、26]

⑲「天野原尋常高等小学校校歌」田中信太郎、一九三三（昭和八）年十月（現上越市立三郷小学校校歌）

⑳「新潟県立小千谷高等女学校校歌」大和田愛羅、一九三三（昭和八）年（一九五〇（昭和二十五）年に統合、現小千谷市）

㉑「深沢尋常高等小学校校歌」岩井清志、一九三七（昭和十二）年三月（現長岡市立深沢小学校校歌）

㉒「姫川原尋常高等小学校校歌」高田守久、一九四〇（昭和十五）年（旧歌、二〇一五（平成二十七）年に廃校、現妙高市）

㉓「大崩国民学校校歌」石井信夫、一九四一（昭和十六）年八月（一九九三（平成五）年に閉校、現小千谷市）[27、28]

---

[21] 麓小学校の沿革によれば「明治四十二（一九〇九）年、弥彦村弥彦南尋常小学校と改称。（略）。大正十三（一九二四）年七月十四日、校歌制定式挙行。（略）。昭和四十五（一九七〇）年三月三十一日、新潟県西蒲原郡弥彦村立麓小学校閉校」とある。ちなみに校歌制定時の校長は「渡辺寛三郎」といい、「大正十二（一九二三）年一月十三日」に就任し、「昭和四（一九二九）年三月三十一日」に転任した。（弥彦村誌編纂委員会『弥彦村誌』弥彦村,1971,pp.153-157°）

[22] 「明治四十三（一九一〇）年三月三十一日、修業年限二ケ年の高等小学科併置許可村立川崎尋常高等小学校と校名改称」とある。（百周年実行委員会記念史編集部『「創立百年史」』長岡市立川崎小学校,1973,p.2°）

[23] 小嶋一雄『ああ校歌　新潟県小・中・高等学校統廃合校校歌』教材社,1982,p.61°

[24] 学校沿革史の第一章名稱によれば「明治四十一（一九〇八）年、新潟縣西頸城郡能生谷村立西能生尋常小學校ト改称ス。昭和十六（一九四一）年、四月一日國民學校令實施ニ伴ヒ西能生國民學校ト改称ス」とある。ちなみに校歌制定時の校長は「眞部侃一」といい、職名は「訓校」、資格は「高正」、任命年月日は「昭和二・八・三一」、轉退職年月日は「昭和八・三・三一」、俸給は「八五」、本籍地は「西頸能生町」、生年月日は「明治二七・七・二九」とある。（西能生尋常小学校『学校沿革史　大正十二年～昭和三十八年』西能生尋常小学校,1964,pp.5,26°）

[25] 小嶋一雄『ああ校歌　新潟県小・中・高等学校統廃合校校歌』教材社,1982,p.61°

[26] 学校沿革史の重要記事によれば「昭和四（一九二九）年三月八月、本校創立五十周年紀年式ヲ挙ゲ。昭和四（一九二九）年三月、本校校歌制定五十周年紀念事業トシテ同窓会其ノ費用ハ拾五円ヲ負擔ス」とある。ちなみに校歌制定時の校長は「渡邊龍雄」といい、大正十五年三月三十一日に「本郡西山尋校ヨリ訓長転任」とある。（柱道尋常小学校『学校沿革史　明治三十八年～昭和三十六年』柱道尋常小学校,1962,pp.50,114°）

[27] 簗田勝二『学びの歌―小千谷立小・中学校等の校歌及び校章―』簗田勝二,2004,pp.29,88°

[28] 「昭和一六（一九四一）年・四　新潟県中魚沼郡岩沢村立大崩国民学校と改称する。修業年限　初等科…六年、高等科…二年。八　校歌制定、二十七日に発表会を開く。同窓会では、前年の皇紀二千六百年記念事業として大崩

㉔「筒石国民学校校歌」石井信夫、一九四二（昭和十七）年五月（一九六九（昭和四十四）年統合、現糸魚川市）[29]

㉕「富岡小学校校歌」不詳、年代不詳

七　平野秀吉の著作（その他）

以下の十二点を確認することができた。いずれも未刊行（一部刊行の著作を含む）である。

凡例：『書名』（刊行・一部刊行・未刊行）〔備考など〕

①『萬葉集動植物考　其一』（刊行）
〔植物の部　あかね～つぎね、全三四八頁〕[30]

②『萬葉集動植物考　其二』（刊行）
〔植物の部　つぎねふ～おみなべし、全二五五頁〕[31]

③『萬葉集動植物考　其三』（刊行）
〔動物の部　あかごま～をしどり、全二六二頁〕[32]

④『全釈万葉集昭和略解』（未刊行）[33]

⑤『万葉集人物考　附作者別作歌一覧（其一）（其二）』（未刊行）[34]

⑥『万葉集注釈牽引』（未刊行）[35]

⑦『つれづれ草紙　拾八巻』（未刊行）[36]

⑧『つれづれ草紙　弐拾巻』（未刊行）[37]

⑨『つれづれ草紙　弐拾参巻』（未刊行）[38]

校校歌の制定を総会で決議し、広く寄付金を募って資金作りをすすめた。作詞は、高田師範学校元教諭平野秀吉先生に依頼し、作曲は同じく高田師範学校教諭石井信夫先生に依頼し、八月九日にできあがり、二十七日に発表会を行った。」とある。（閉校記念事業実行委員会『大崩小学校閉校記念　水ばしょう』小千谷市,1992,p.14°）

29　学校沿革史の校歌によれば「校歌制定（同窓會より資金寄附）平野秀吉作歌、石井信夫作曲、昭和十七（一九四二）年十月十九日文部大臣許可」とあり、記事事項（昭和十七年度）では「五月一日、校歌制定、披露記念音樂會擧行。平野秀吉氏作歌、石井信夫氏作曲（昭和十七年十月十九日文部大臣許可）」とある。ちなみに校歌制定時の校長は「平田定義」といい、任年月は「昭和十五・〇・〇」、免年月は「一八・三・三一」、本籍は「中頸城郡吉川村」とある。（筒石小学校『学校沿革史　大正二年～昭和四十三年』筒石小学校,1969,pp.4,5,23,165°）

30　平野秀吉が一九四三（昭和十八）年に完稿し未刊行であった著作物を、二〇一四（平成二十六）年十月に新潟市巻郷土資料館が印刷・刊行し、現在、新潟市立巻図書館に配架されている。

31　同30。

32　同30。

33　巻四から巻十三、巻十五から巻二十は未刊行であり、原稿用紙（六〇〇字）二四八四枚、地図十一枚、植物図その他十三枚からなる。（巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録No.六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,pp.1-2°）

34　其一と其二の二冊からなる。（巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録No.六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,p.5°）

35　原稿用紙（六〇〇字）二三七枚からなる。（巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録No.六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,p.6°）

36　短歌三三七首からなる。「明治はたとせ（二十年）あまりよとせ（四年）の長月（九月）のはじめつかた」とあり、一八九一（明治二十四）年九月から詠歌した。（巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録No.六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,p.8°）

37　短歌二二一首からなる。一八九二（明治二十五）年四月から詠歌した。（巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録No.六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,p.8°）

38　短歌二三四首からなる。一八九四（明治二十七）年正月から詠歌した。（巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録No.六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,p.8°）

⑩『歌集　参拾弐』（一部刊行）[39]

⑪『歌集　参拾参』（一部刊行）[40]

⑫『高嶺いばらを含む晩年歌集』（一部刊行）[41]

八　まとめ

これまで挙げた著作物の傾向に基づいて、四つの著作群に分類できることが明らかとなった（表）[42]。具体的には、「国語教育を充実させるための著作群」、「歌人としての著作群」、「作詞者としての著作群」、「その他の著作群」である。それぞれの著作群について解説を加える。

（1）国語教育を充実させるための著作群

平野秀吉が新潟県高田師範学校教諭となったのは、一九〇一（明治三十四）年四月八日である[43]。当時の師範学校における、学科目「国語」の構成分野について示したい。文部省令第八號（一八九二（明治二十五）年七月十一日）の「尋常師範學校ノ學科及其程度」[44]によれば、「尋常師範學校ノ男子生徒ニ課スヘキ學科目」の一つとして、「國語」がある。「第一學年（毎週四時）」は「講讀」「文法」「作文」からなり、それぞれ「平易ニシテ雅馴ナル文章ヲ講讀セシム」、「音韻ノ性質假名ノ用法言語ノ種類文章ノ諸規則ヲ授ク」、「文題ヲ與ヘ平易ナル文體ニ依リ日用書類記事文等ヲ作ラシム」と解される。「第二學年（毎週二時）」は「講讀」「作文」からなり、それぞれ「中古以降ノ雅馴ナル文章及歌ヲ講讀セシム」、「前學年ニ準シ更ニ論説文等ヲ作ラシメ兼テ簡易ナル漢文ヲ國文ニ飜譯セシム」と解される。「第三學年（毎週二時）」は「文學史ノ大要」、「作文」、「讀書作文ヲ教授スル順序方法ヲ授ク」からなり、「文學史ノ大要」は「片假名平假名ノ起源ヨリ國文學ノ發達變遷ノ要略ヲ授ケ古今諸體ノ文章及歌ノ中標準トナルヘキモノヲ講讀セシム」と解され、「作文」は「前學ニ準ス」と解される。このことから、平野秀吉が新潟県高田師範学校に着任した当時の学科目「国語」は、「講読」「文法」「作文」「文学史ノ大要」「読書作文ヲ教授スル順序方法ヲ授ク」の五つの分野からなることが明らかとなった。この五つの分野に関連する、平野秀吉の著作物を探索すると、多数散見されることに気がつく。学科目「国語」の教育活動を充実させる目的をもって編まれた著作物といえる。具体的には次の著作物が当てはまる。

平野秀吉の著作（図書）では、『実用文典』、『国語音声学』、『綴り方教授の根本的研究』、『唐詩選全釈』、『良寛と萬葉集』、『良寛と萬葉集』（浅田壮太郎補遺）、『全釈萬葉集昭和略解　総論・巻一・巻二』、『全

---

39 短歌三一〇首、長歌四首からなり、「歌集駒くさ（昭和三年刊行）発行のため整理された」もの。（巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録№六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,p.9°）

40 短歌一一三首からなり、「歌集駒くさ（昭和三年刊行）発行のため整理された」もの。（巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録№六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,p.9°）

41 「日記帳（昭和八年版）に（略）、約一七六〇首を数え。歌集「高嶽いばら」（昭和十四年刊）を含む晩年の歌」や「戦後の作歌は二一〇首で昭和二十二年三月二十一日が最後となっている（同年五月二十七日死亡）」とある。（巻町郷土資料館『巻町郷土資料館目録№六　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,p.9°）

42 表中の数値は小数点第二位を四捨五入して求めた。

43 前掲9,p.11°

44 越佐教育雑誌社『地方學制提要』越佐教育雑誌社,1898,pp.22-27°

釈萬葉集昭和略解　巻三』、『全釈萬葉集昭和略解　巻十四』、『萬葉集短歌選』が該当し、平野秀吉の著作(図書)全体の五十八・八％を占める。

平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合では、「図書審査ニ関シテ読本選定ノ注意付　文部省編纂読本ノ語格誤謬」、「田中勇吉君ノ文部省編輯尋常小学評論弁ヲ読ミテ」、「日本ニ於ケル倫理学善悪ノ標準」、「松の雫」、「松の雫（二）」、「松の雫（三）」、「松の雫（四）」、「薄田君に寄す」、「小学語法並に修辞法講義（一）」、「国語教授法の教材論（二）」、「小学教育に於ける仮名遣問題（一）」、「小学教育に於ける仮名遣問題（二）」「国語科入学試験問題に就て」が該当し、平野秀吉の著作(論文等)『越佐教育雑誌』の場合全体の八十六・七％を占める。

平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』以外の場合では、「声音学に付いて」が該当し、平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合全体の十二・五％を占める。

平野秀吉の著作（その他）では、『萬葉集動植物考　其一』、『萬葉集動植物考　其二』、『萬葉集動植物考　其三』、『全釈万葉集昭和略解』(未刊行)、『万葉集人物考　附作者別作歌一覧（其一）（其二）』(未刊行)、『万葉集注釈牽引』(未刊行）が該当し、平野秀吉の著作（その他）全体の五十％を占める。

このように、平野秀吉の著作（図書）の六割弱、『越佐教育雑誌』に寄稿した論文等の九割弱が、中等教育学校における学科目「国語」の、教育活動を充実させるために編まれたものであることから、平野秀吉を教材研究や素材研究に熱心に行う「国語教員」として特徴づけることができる。

（2）歌人としての著作群

平野秀吉は歌人としての著作物を多く残している。具体的には次の著作物が当てはまる。

平野秀吉の著作（図書）では、『日本アルプス登山案内記　附歌集駒草』(六月版)、『日本アルプス登山案内記　附歌集駒草』(七月版)、『山嶽歌集　駒くさ』、『山嶽の歌第二集　高嶺いばら』が該当し、平野秀吉の著作（図書）全体の二十三・五％を占める。

平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合では、「明治四十二年八月十八日登大蓮華山作歌一首並短歌」が該当し、平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合全体の六・七％を占める。

平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』以外の場合では、「村山紀一郎君を悼む」、「旭は燃えむとす」、「五色ケ原をよめる歌」が該当し、平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』以外の場合全体の三十七・五％を占める。

平野秀吉の著作（その他）では、『つれづれ草紙　拾八巻』(未刊行)、『つれづれ草紙　弐拾巻』(未刊行)、『つれづれ草紙　弐拾参巻』(未刊行)、『歌集　参拾弐』(一部刊行)、『歌集　参拾参』(一部刊行)、『高嶺いばらを含む晩年歌集』(一部刊行）が該当し、平野秀吉の著作（その他）全体の五十・〇％を占める。

ここで考えなければならないことは、平野秀吉が単なる歌人ではないということである。平野秀吉は著書『日本アルプス登山案内記　附歌集駒草』の「自序」で示しているとおり[45]、山嶽文学を支持し、山嶽歌人としての自らの存在意義を、次のとおり示している。

45　平野秀吉『日本アルプス登山案内記　附歌集駒草』斯文書院,1927,pp.12-13。

（略）。尤も偉大な大自然禮讃の文學が、尤も偉大な山嶽文學となつて著れて來て、其れ青年男女の爲に、極めて健全な讀物の一つであるべきにも拘わらず、文に詩に歌に、殆んど何物も出ないことを怪しみ訝るのである。彼の藤原奈良時代の作者の豪宕雄健の調に托した、其の眞摯熱烈の想が、光輝ある萬葉集となつたが如く、尤もうたわれなければならぬものが、全く文壇に顧られてゐないのである。歌人、山にはいらざるか、山、歌人を入れざるか。（略）。

このように、「大自然禮讃の文學」が昇華され、萬葉集に匹敵する存在になることを予言した平野秀吉は、山嶽文学の支持者、すなわち山嶽歌人として、数多くの著作物を残している。

具体的には次の著作物が当てはまる。平野秀吉の著作（図書）では、『日本アルプス登山案内記　附歌集駒草』、『山嶽歌集　駒くさ』、『日本アルプス登山案内記』、『山嶽の歌第二集　高嶺いばら』が該当し、平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合では、「明治四十二年八月十八日登大蓮華山作歌一首並短歌」が該当し、平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』以外の場合では、「五色ケ原をよめる歌」が該当する。

歌人としての著作物のうち、山嶽歌人としての著作物は、平野秀吉の著作（図書）の二割強が当てはまり、平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』内外の合計数のうち半分が当てはまることから、平野秀吉を「山嶽歌人」として特徴づけることができる。

（3）作詞者としての著作群

平野秀吉は本調査により二十五曲の作詞を手がけていることが明らかとなった。この二十五曲のうち、十九曲が校歌であり、平野秀吉の著作（作詞）全体の七十六・〇％を占める。十九曲の校歌のうち、十五曲が小学校の校歌であり、平野秀吉の著作（作詞）全体の六十・〇％を占める。このことから、平野秀吉の作詞曲の七割強は校歌であり、小学校の校歌は全作詞曲の六割を占めることから、平野秀吉を「校歌作詞者」として特徴づけることができる。

（4）その他の著作群

平野秀吉は、日本アルプスの登山方法の解説、教育者としての技量を高めるために参加した講習会の報告、教え子や知人に対する追悼文等、さらに平野秀吉胸像除幕式に関する記事や挨拶文についての著作物がある。

平野秀吉の著作（図書）では、『日本アルプス登山案内記』（四年版）、『日本アルプス登山案内記』（五年版）、『日本アルプス登山案内記』（六年版）が該当し、平野秀吉の著作（図書）全体の十七・六％を占める。

平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合では、「第四回大日本教育会夏期講習会概況」が該当し、平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合全体の六・七％を占める。

平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』以外の場合では、「除幕式謝恩式記事　平野先生御挨拶」、「祝宴会状況　平野先生御挨拶」、「平野先生御挨拶状」、「力め行ふは仁に近し」が該当し、平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』以外の場合全体の五十・〇％を占める。

最後に、これまで述べてきた四つの著作群（「国語教育を充実させるための著作群」、「歌人としての著作群」、「作詞者としての著作群」、「その他の著作群」）が、それぞれ平野秀吉の著作物全体に占める割合

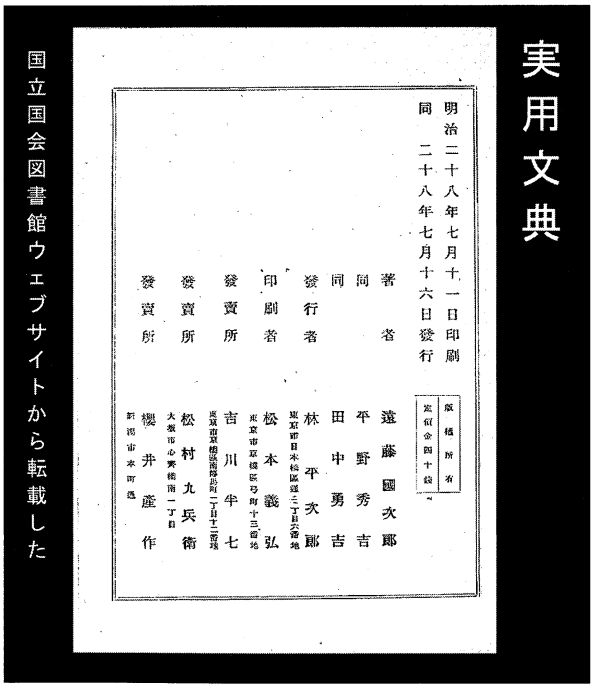
（表）を示し、稿を脱したい。

著作物全体に占める「国語教育を充実させるための著作群」の割合は三十九・〇％、「歌人としての著作群」の割合は十八・二％、「作詞者としての著作群」の割合は三十二・五％、「その他の著作群」の割合は十・四％となった。このことは平野秀吉の「国語教員」、「校歌作詞者」、「歌人（山嶽歌人）」としての在り方・生き方を裏づける結果となっている。

九　後記

本調査研究は平野秀吉の著作物の全容を明らかにする目的で行った。平野秀吉の著作物は多分野に渡るため、調査研究には長年の歳月を要した。その間、明星大学教授の廣嶋龍太郎先生には親切なる指導と励ましの言葉を頂くとともに、私の拙い文章を読み、ご教示を賜った。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

胸像制作のためのモデル写真



実用文典

明治二十八年七月十一日印刷
同　二十八年七月十六日發行

原價　壹圓金四十錢

著者　遠藤國次郎
同　平野秀吉
同　田中勇吉
發行者　林平次郎
印刷者　松本義弘
發賣所　吉川半七
發賣所　松村九兵衛
發賣所　櫻井產作

国立国会図書館ウェブサイトから転載した

〈筆者・明星大学通信制大学院博士後期課程教育学研究科在学〉

表．平野秀吉の著作群

	国語教育を充実させるための著作群	歌人としての著作群	作詞者としての著作群	その他の著作群
平野秀吉の著作（図書）『書名』				
① 実用文典	○			
② 国語声音学	○			
③ 綴り方教授の根本的研究	○			
④ 日本アルプス登山案内記　附歌集駒草		○		
⑤ 日本アルプス登山案内記　附歌集駒草		○		
⑥ 山嶽歌集　駒くさ		○		
⑦ 日本アルプス登山案内記				○
⑧ 唐詩選全釈	○			
⑨ 日本アルプス登山案内記				○
⑩ 日本アルプス登山案内記				○
⑪ 山嶽の歌第二集　高嶺いばら		○		
⑫ 良寛と萬葉集	○			
⑬ 良寛と萬葉集	○			
⑭ 全釈萬葉集昭和略解　総論・巻一・巻二	○			
⑮ 全釈萬葉集昭和略解　巻三	○			
⑯ 全釈萬葉集昭和略解　巻十四	○			
⑰ 萬葉集短歌選	○			
平野秀吉の著作（図書）全体に占める割合（%）	58.8	23.5	0.0	17.6
平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合　「題名」				
① 図書審査ニ関シテ読本選定ノ注意付　文部省編纂読本ノ語格誤謬	○			
② 第四回大日本教育会夏期講習会概況				○
③ 田中勇吉君ノ文部省編輯尋常小学評論弁ヲ読ミテ	○			
④ 日本ニ於ケル倫理学善悪ノ標準	○			
⑤ 松の雫	○			
⑥ 松の雫（二）	○			
⑦ 松の雫（三）	○			
⑧ 松の雫（四）	○			
⑨ 薄田君に寄す	○			
⑩ 小学語法並に修辞法講義（一）	○			
⑪ 明治四十二年八月十八日登大蓮華山作歌一首並短歌		○		
⑫ 国語教授法の教材論（二）	○			
⑬ 小学教育に於ける仮名遣問題（一）	○			
⑭ 小学教育に於ける仮名遣問題（二）	○			
⑮ 国語科入学試験問題に就て	○			
平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』の場合全体に占める割合（%）	86.7	6.7	0.0	6.7
平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』以外の場合　「題名」				
① 声音学に付いて	○			
② 除幕式謝恩式記事　平野先生御挨拶				○
③ 祝宴会状況　平野先生御挨拶				○
④ 平野先生御挨拶状				○
⑤ 力め行ふは仁に近し				○
⑥ 村山紀一郎君を悼む		○		
⑦ 旭は燃えむとす		○		
⑧ 五色ヶ原をよめる歌		○		
平野秀吉の著作（論文等）『越佐教育雑誌』以外の場合全体に占める割合（%）	12.5	37.5	0.0	50.0
平野秀吉の著作（作詞）「曲名」				
① 支那征伐の歌（元寇の譜）			○	
② 討清軍歌			○	
③ 凱旋の歌（四百餘州の譜）			○	
④ 修身教歌			○	
⑤ 歓迎の歌			○	
⑥ 新潟県立三条中学校校歌			○□	
⑦ 指おれば			○	
⑧ 新潟県高田師範学校校歌			○□	
⑨ 新津尋常高等小学校校歌			○■	
⑩ 能生尋常高等小学校校歌			○■	
⑪ 新潟県高田師範学校校歌			○□	
⑫ 稲田尋常高等小学校校歌			○■	
⑬ 戸野目尋常高等小学校校歌・上雲寺尋常高等小学校校歌			○■	
⑭ 小池尋常高等小学校校歌			○■	
⑮ 弥彦南尋常小学校校歌			○■	
⑯ 川崎尋常高等小学校校歌			○■	
⑰ 西能生尋常小学校校歌			○■	
⑱ 柱道尋常小学校校歌			○■	
⑲ 天野原尋常高等小学校校歌			○■	
⑳ 新潟県立小千谷高等女学校校歌			○□	
㉑ 深沢尋常高等小学校校歌			○■	
㉒ 姫川原尋常高等小学校校歌			○■	
㉓ 大崩国民学校校歌			○■	
㉔ 筒石国民学校校歌			○■	
㉕ 富岡小学校校歌			○■	
平野秀吉の著作（作詞）全体に占める割合（%）	0.0	0.0	100.0	0.0
平野秀吉の著作（その他）『書名』				
① 萬葉集動植物考　其一	○			
② 萬葉集動植物考　其二	○			
③ 萬葉集動植物考　其三	○			
④ 全釈万葉集昭和略解	○			
⑤ 万葉集人物考　附作者別作歌一覧（其一）（其二）	○			
⑥ 万葉集注釈牽引	○			
⑦ つれづれ草紙　拾八巻		○		
⑧ つれづれ草紙　弐拾巻		○		
⑨ つれづれ草紙　弐拾参巻		○		
⑩ 歌集　参拾弐		○		
⑪ 歌集　参拾参		○		
⑫ 高嶺いばらを含む晩年歌集		○		
平野秀吉の著作（その他）全体に占める割合（%）	50.0	50.0	0.0	0.0
平野秀吉の著作物全体に占める割合（%）	39.0	18.2	32.5	10.4

（注１）○は該当していることを示す。
（注２）■は小学校の校歌を、□は小学校以外の校種の校歌をそれぞれ示す。